子供の場所

エプロン通信員　末吉　郁子

忘れられないあの日がある。就園前の息子とふたり、トロピカルビーチへ。海に向かって走っていった息子が波打ち際で砂を掘るお兄ちゃんをみて足をとめた。

すると、お兄ちゃんが「小さい子、いっしょに遊んでいい？」と仲間に告げ、息子を輪に入れてくれた。お兄ちゃん達は遊泳区域の囲いギリギリの深いところで遊び、仲間と交替で波打ち際にいる息子の相手をしてくれた。お昼をはさんで、私と息子とで海でちゃぷちゃぷやっていると、息子の名を叫び全員で海の中に駆け寄ってきて再び仲間入り。こんなに面倒見がよくて優しい子たちに感動した。

別れ際、「〇〇小学校のサッカーチームだよ、遊びにおいでね！」と引率の女性が手を振っていた。こんなに素敵な少年達ならすばらしいチームだろうなぁ。

一方、ある小学校のサッカーチームは成績は良いけれど、お母さん方のいじわる・陰口で雰囲気が良くなく、とても楽しめない感じなのだという。子供のための場所なのに・・・。

子供の場は、子供たちだけでなく親にとっても経験という学びからいろんなものを身につけられる場でもあるが、いっしょにいる子供たちがくだらない大人たちの影響を受けてしまうのはもったいない。

子供にわるい子はいなくて、本当にわるい人間にしてしまうのは私たち大人だ。自分の子にはもちろん、周りの子供たちの世界にも責任をもちたいと思う。

今年、ランドセル一年生の息子の学校に四月から赴任した女性の校長先生が「地域の子供たちをみんなで育てましょう」とおっしゃっていた。嬉しかった。

茶ぐわーゆんたく 63

幻の宜野湾産ウナギ！

今年の土用丑の日は七月十九日と三十一日です。この日はウナギを食べる方も多いと思いますが、実は地元宜野湾産のウナギがあったこと、ご存知ですか？

今から約四十年前の一九七〇（昭和四十五）年十二月、大山に市営の養鰻研究センターができました（現在のうなばら保育所あたり）。

これは静岡県との提携で、シラス（ウナギの稚魚）を静岡県から輸入（当時は復帰前）し、それを宜野湾で育てる計画だったようです。市は、「将来は本市の根幹産業に」と期待していました。

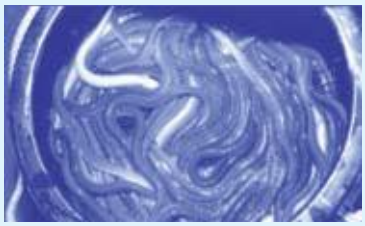
ウナギの養殖は大変だったようで、雨の日には養殖プールがあふれ、ウナギが海に逃げ出す事件もありました。また、夜中にウナギが盗まれる事もあり、職員が交代で番をしていました。さらに、無事育ったウナギを出荷する際には、職員総出でウナギを捕まえていました。

▲養鰻センター

その一方で、シラスの輸入先や値段等に食い違いがあり、大きな問題に発展した事もあったようです。

しかし、センターができて四年後の一九七四（昭和四十九）年、ウナギを養殖していたはずのプールは、別の施設になってしまっていました。

市の根幹産業にと期待と夢を背負っていたはずが、わずか四年余りで消えてしまった、幻の宜野湾産ウナギ。いったいどんな味だったのでしょうか？今年の丑の日は、はかなく消えた宜野湾ウナギを思ってみるのもいかもしれません。


▲センターでとれた鰻

『宜野湾市史』への問い合わせ
教育委員会文化課
☎八九二―四四三〇